

指を骨折しながら組手試合挑戦！

北原正登 (佐賀小城跆拳道クラブ、11歳) 根性のあるさっ！

(佐賀弁・監修北川)

前々日、足を骨折しながら往復約5時間の基礎理論講義会場参加！

砥綿孝汰 (イオン筑紫野跆拳道クラブ、9歳) 昇段への熱意があるばいね！

(福岡弁・監修三上妻)

3年目を迎えた疫病禍の2022年3月20日(日)に開催された第11回佐賀県テコンドー選手権大会及び日本跆拳道基礎理論講義・佐賀唐津会場において、九州テコンドー連盟加盟クラブ少年部の根性と熱意を観じる出来事がありました。

北原正登(佐賀小城TC)は、学校行事で指を骨折しましたが、

「試合に出たい！」

という本人の強い意志と両親の承諾により、エントリーしていた佐賀県大会少年部組手試合を棄権せず出場しました。激痛に耐えながらも、準優勝に輝きました。



砥綿孝汰（福岡イオン筑紫野TC）は、基礎理論講義の前々日に転倒し、右足くるぶしを骨折しました。予定していた審査は棄権せざるを得ませんでした。初段昇段への思い、熱意が強く、「黒帯になりたい！ 基礎理論講義に参加したい！」

という本人の強い意志と両親の承諾により居住地の福岡県から車で片道2時間半かけて基礎理論講義・佐賀唐津会場に参加しました。



河 明生会長談

「私は、人は誰も、『やる気のロウソク』を持っていると考えています。

生ある限り『やる気のロウソク』が燃え続ける人もいれば、すぐ消えてしまう人もいます。

問題は『やる気のロウソク』に、いつ、誰が、火をつけるのか、ということです。

まず、いつなのか？

若ければ若いほどよい。とくに、少年少女時代が望ましいと考えます。

次いで誰が？

先生と呼ばれる立場にある大人に感化された少年少女が『やる気のロウソク』に自ら火をつける、これが最も望ましいと考えます。

11歳の少年が利き手の指を骨折しながら「金メダルを取りたい！」という強い意志に基づき打撃系武道の試合に出場する勇気はすばらしい！

9歳の少年が前々日に足を骨折し、精神的にも肉体的にもきついはずなのに、「黒帯を取りたい！」という強い意志に基づき往復5時間かけても基礎理論講義を聞こうとする熱意はすばらしい！

北原正登も、砥綿孝汰も、日本跆拳道を通じて『やる気のロウソク』に自ら火をつけたと言えるでしょう。近い将来、二人の目標が達成されれば、『やる気のロウソクを燃やした結果としての達成感』を観じるはずで、達成感は自信につながります。

自信があればこそ人は挑戦し続けるのではないのでしょうか？

この体験を大学受験や天職活動につなげるよう、あるいは応用できるよう導くのが日本跆拳道の指導方針です。九州テコンドー連盟の少年少女部は根性があり、熱意があり、親もその根性と熱意を支える精神風土があると思われま

3年にも及ぶ疫病禍で恐れおののき自滅している人々が多い中、彼らが見せてくれた気合いとやる気、根性と熱意こそが、多くの大人達が見習うべき疫病に勝つ心意気だと観じました」